

校異源氏物語・まきはしら

内にきこしめさむこともかしこしはし人にあまねくもらさしといさめきこえ
給へとさしもえつゝみあへたまはすほとふれといさゝかうちとけたる御けしき
もなく思はすにうきすぐせなりけりと思ひいり給へるさまのたゆみなきをいみ
しうつらしと思へとおほろけならぬ契のほどあはれにうれしく思ひまゝにめ
てたくおもふさまなる御かたちありさまをよそのものにみはてゝやみなましよ
と思たにむねつふれていし山のほとけをも弁のおもとをもならへていたゝかま
ほしうおもへと女君のふかくものしとうとみにければえましらはてこもりゐに
けりけにそこら心くるしけなることゝもととりくゝにみしかと心あさき人のた
めにそてらのけんもあらはれけるおとゝも心ゆかすくちおしとおほせといふか
ひなき事にてたれもくゝかくゆるしそめ給へることなればひきかへしゆるさぬ
けしきをみせむも人のためいとおしうあいなしとおほしてきしきいになくも
てかしつき給いつしかとわか殿にわたいたてまつらんことを思いそき給へとか
るくしくふとうちとけわたり給はんにかしこにまちとりてよくもおもふまし
き人のものし給なるかいとおしさにことつけ給てなを心のとかになたらかなる
さまにてをとなくいつかたにも人のそしりうらみなかるへくをもてなし給へと
そきこえ給ちゝおとゝは中くゝめやすかめりことにこまかなるうしろみなき人
のなまほのすいたる宮つかへにいて立てくるしけにやあらむとそうしろめたか
りし心さはありなから女御かくてもものし給をゝきていかゝもてなさましなと
しのひでの給けりけにみかとゝきこゆとも人におほしおとしはかなき程にみえ
たてまつり給てものくしくもゝてなし給はすはあはつけきやうにもあへかり
けり三日の夜の御せうそこともきこえかはし給けるけしきをつたへきゝ給てな
むこのおとゝのきみの御心をあはれにかたしけなくありかたしとはおもひきこ
え給けるかうしのひ給御ながらひのことなれとをのつから人のおかしきことに
かたりつたへつゝつきくゝにきゝもらしつゝありかたきよかたりにそさゝめき
ける内にもきこしめしてけりくちおしうすぐせことなりける人なれとさおほし
しほいもあるを宮つかへなとかけくゝしきすちならはこそは思たえ給はめなと
の給はせけりしも月になりぬ神わさなとしけくないし所にもことおほかるころ

にて女くわんとも内侍ともまいりつゝいまめかしう人さはかしきに大将殿ひる
もいとかくろへたるさまにもてなしてこもりおはするをいと心つきなくかむの
君はおほしたり宮などはまいていみしうくちおしとおほす兵衛の督はいもうと
の北の方の御ことをさへ人わらへにおもひなけきてとりかさね物おもほしけれ
とおこましうらみよりもいまはかひなしと思かへす大将はなにたてるま
め人のとし比いさゝかみたれたるふるまひなくてすくし給へるなこりなく心ゆ
きてあらさりしさまにこのましうよひあか月のうちしのひ給へるいていりもえ
んにしなし給へるをおかしと人くゝみたてまつる女はわらゝかにゝきはゝしく
もてなし給本上もゝてかくしていといったう思むすほゝれ心もてあかぬさまはし
るきことなれとおとゝのおほすらむこと宮の御心さまの心ふかうなさけくゝし
うおはせしなどを思いて給にはつかしうくちおしうのみおもほすにもの心つき
なき御けしきたえす殿もいとおしう人くゝも思うたかひけるすちを心きよくあ
らはし給て我心なからうちつけにねちけたることはこのますかしとむかしより
のこともおほしいてゝむらさきのうへにもおほしうたかひたりしよなときこえ
給いまさらに人の心くせもこそとおほしなから物のくるしうおほされし時さて
もやとおほしより給しことなれはなをおほしもたえす大将のおはせぬひるつか
たわたり給へり女君あやしうなやましけにのみもてなひ給てすくよかなるおり
もなくしほれ給へるをかくてわたり給へればすこしをきあかり給て御木丁には
たかくれておはす殿もよいことにすこしけゝしきさまにもてない給ておほか
たのことともなときこえ給すくよかなる世のつねの人にならひてはましていふ
かたなき御けはひありさまをみしり給にも思ひのほかなる身のをき所なくはつ
かしきにも涙そこほれけるやうくゝこまやかなる御物かたりになりてちかき御
けうそくによりかゝりてすこしのそきつゝきこえ給いとおかしけにおもやせ給
へるさまのみまほしうらうたい事のそひたまへるにつけてもよそにみはなつも
あまりなる心のすさひそかしとくちおし

おりたちてくみはみねともわたり川人のせとはたちきらさりしをおもひの
ほかなりやとてはなうちかみ給ふけはひなつかしうあはれなりをんなはかほを
かくして

みつせ川わたらぬさきにいかてなを涙のみのあはときえなん心おさなの
御きえところやさてもかのせはよきみちなかなるを御てのさきはかりはひきた
すけきこえてんやとほゝゑみ給てまめやかにはおほしゝることもあらむかしよ
になきしれくゝしさも又うしろやすさもこの世にたくひなきほどをさりともと

なんたのもしきときこえ給をいとわりなうきゝくるしとおほいたれはいとおし
うての給まきはしつゝ内にの給はすることなむいとおしきを猶あからさまに
まひらせたてまつらんをのか物とりやうしはてゝはさやうの御ましらひもかた
けなめるよなめり思そめきこえし心はたかふさまなめれと二条のおとゝは心ゆ
き給なれは心やすくなむなとこまかにきこえ給あはれにもはつかしくもきゝ給
ことおほかれとたゝ涙にまつはれておはすいとかうおほしたるさまのこゝろく
るしければおほすさまにもみたれ給はすたゝあるへきやう御心つかひをゝしへ
きこえ給かしこにわたり給はん事をとみにもゆるしきこえ給ましき御けしきな
り内へまいり給はむことをやすからぬことに大将おほせとそのついでにやまか
てさせたてまつらんの御心つき給てたゝあからさまの程をゆるしきこえ給かく
しのひかくろへ給御ふるまひもならひ給はぬ心ちにくるしければ我とのゝうち
すりししつらひて年比はあらしうつもれうちすて給へりつる御しつらひよろつ
のきしきをあらためいそぎ給きたの方のおほしなけくらむ御心もしり給はすか
なしうし給し君たちをもめにもとめ給はすなよひかなさけゝしき心うちま
しりたる人こそとさまかうさまにつけても人のためはちかましからんことをは
おしはかり思ふところもありけれひたおもむきにすくみ給へる御心にて人の御
心うこぎぬへきことおほかり女君人におとり給へきことなし人の御本上もさる
やんことなきちゝみこのいみしうかしつきたてまつり給へるおほえよにかるか
らす御かたちなどいもうとおはしけるをあやしうしふねき御物のけにわつら
ひ給てこのとしころ人にもに給はすうつし心なきおりゝおほく物し給て御中
もあくかれてほとへにけれとやむことなき物とはまたならふ人なく思きこえ給
へるをめつらしう御心移る方のなめにたにあらす人にすくれ給へる御ありさ
まよりもかのうたかひをきてみな人のおしはかりしことさへ心きよくてすくい
給けるなどを有かたうあはれと思ましきこえ給もことはりになむ式部卿の宮き
こしめしていまはしかいまめかしき人をわたしてもてかしつかんかたすみに人
わろくてそひ物し給はむも人きゝやさしかるへしをのかあらむこなたはいと人
わらへなるさまにしたかひなひかてもゝのし給なんとのたまひてみやのひんか
しのたいをはらひしつらひてわたしたてまつらんとおほしの給をおやの御あた
りといひなからいまはかきりの身にてたちかへりみえたてまつらむことゝ思み
たれ給にいとゝ御心地もあやまりてうちはへふしわつらひ給本上はいとしつか
に心よくこめき給へる人の時ゝ心あやまりして人にうとまれぬへきことなん
うちましり給ひけるすまひなどのあやしうしとけなく物のきよらもなくやつし

ていとむもれいたくもてなし給へるをたまをみかけるめうつしに心もとまらね
としころの心さしひきかふる物ならねは心にはいとあはれと思ひきこえ給き
のふけふのいとあさはかなる人の御なからひたによろしき、はになれはみなお
もひのとむるかたありてこそみはつなれいと身もくるしけにもてなし給つれは
きこゆへきこともうちいきこえにく、なむとしころ契きこゆることにはあら
すやよの人にもぬ御ありさまをみたてまつりはてんとこそはこゝら思ひしつ
めつ、すくしくるにえさしもありはつましき御心をきてにおほしうとむなをさ
なき人ゝも侍れはとさまかうさまにつけてをろかにはあらしときこえわたる
を女の御心のみたりかはしきままにかくうらみわたり給ひとわたりみはて給は
ぬほどさもありぬへきことなれとまかせてこそいましはし御らんしはてめ宮の
きこしめしうとみてさはやかにふとわたしたてまつりてむとおほしの給なんか
へりていとかるゝしきまことにおほしをきつることにやあらむしはしかうし
ゝ給へきにやあらむとうちわらひての給へるいとねたけに心やまし御めしうと
たちてつかうまつりなれたるもくの君中将のおもとなといふ人ゝたに程につ
けつ、やすからすつらしと思ひきこえたるをきたの方はうつし心ものし給ほと
にていとなつかしう、ちなきてる給へり身つからをほけたりひかゝしとの給
はちしむるはことほりなることになむ宮の御ことをさへとりませの給うもりき
ゝ給はんはいとおしうき身のゆかりかるゝしきやうなるみゝなれにて侍れ
はいまはしめていかにものを思ひ侍らすとてうちそむき給へるらうたけなり
いとさゝやかなる人のつねの御なやみにやせおとろへひわつにてかみいとけう
らにてなかゝりけるかわけたるやうにおちほそりてけつることもおさゝし給
はすなみたにまつはれたるはいとあはれなりこまかにゝほへるところはなくて
ちゝ宮ににたてまつりてなまめいたるかたちし給へるをもてやつし給へれはい
つこのはなやかなるけはひかはあらむ宮の御ことをかくはいかゝきこゆるお
そろしう人きゝかたはになの給なしそこしらへてかのかよひ侍所のいとまは
ゆきたまのうてないうひゝしうきすくなるさまにていているほともかたゝ
に人めたつらんとかたはらいたければ心やすくうつろはしてんと思侍るなりお
ほきおとゝのさる世にたくひなき御おほえをはさらにもきこえす心はつかしう
いたりふかうおはすめる御あたりににくけなることもりきこえはいとなんいと
おしうかたしけなかるへきなたらかにて御中よくてかたらひてものし給へ宮に
わたり給へりともわするゝ事は侍らしとてもかうてもいまさらに心さしのへた
ゝることはあるましかれとよのきこえ人わらへにまろかためにもかろゝしう

なむ侍るへきをとしころのちきりたかへすかたみにうしろみむとおほせとこしらへきこえ給へは人の御つらさはともかくもしりきこえすよの人にもにぬ身のうきをなむ宮にもおほしなきていまさらに人わらへなることゝ御心をみたり給なれはいとおしういかてかみえたてまつらんとなむ大殿の北の方ときこゆるもこと人にやは物し給かれはしらぬさまにておいゝて給へる人のすゑの世にかく人のおやたちもてない給つらさをなんおもほしの給なれとこゝにはともかくもおもはずやもてない給はんさまをみるはかりとの給へはいとよの給をれいの御心たかひにやくるしきこともいてこむ大殿の北方のしり給事にも侍らすいつきむすめのやうにて物し給へはかくおもひおとされたる人のうへまてはしり給なんや人の御おやけなくこそものし給へかめれかゝることのきこえあらはいとゝくるしかへきことなど曰ゝとひいりゐてかたらひ申給くれぬれは心もそらにうきたちていかていてなんとおもほすに雪かきたれてふるかゝるそらにふりいてむも人めいとおしうこの御けしきもにくけにふすへうらみなとし給はゝ中くことつけて我もむかひ火つくりてあるへきをいとをひらかにつれなうもてなし給へるさまのいと心くるしけれはいかにせむとおもひみたれつゝかうしなともさなからはしちかううちなかめてる給へり北の方けしきをみてあやにくなめる雪をいかてわけ給はんとすらむよもふけぬめりやとそゝのかし給いまはかきりとゝむともと思ひめくらし給へる気色いとあはれなりかゝるにはいかてかとの給ものからなをこのころはかり心の程をしらてとかく人のいひなしおとゝたちもひたり右にきゝおほさんことをはゝかりてなんとたえあらむはいとおしき思ひしつめて猶みはてたまへこゝになとわたしては心やすく侍なむかくよのつねなる御気色みえ給時はほかさまにわくる心もうせてなんあはれに思ひきこゆるなどかたらひ給へは立とまり給ても御心のほかならんは中くくるしうこそあるへけれよそにても思たにをこせ給はゝ袖のこほりもとけなんかしななこやかにいひぬ給へり御ひとりめしていよくたきしめさせたてまつり給身つからはなえたる御そともうちとけたる御すかたいとゝほそうかよはけなりしめりておはするいと心くるし御めのいたうなきはれたるそすこし物しけれといとあはれとみる時はつみなうおほしていかにすくしつるとし月そとなこりなううつろふ心のいとかろきそやとは思ふくゝなを心けさうはすゝみてそらなけきをうちしつゝなをさうそくし給てちいさきひとりとりよせて袖にひきいれてしゐ給へりなつかしき程になえたる御さうそくにかたちもかのならひなき御光にこそおさるれといとあさやかにおをしきさましてたゝ人とみえす心はつかしけな

りさふらひに人々こゑして雪すこしひまあり夜はふけぬらんかしなとさすかにまほにはあらてそゝのかしきこえてこはつくりあへり中将もくなどあはれのよやなとうちなけきつゝかたらひてふしたるにさうしみはいみしう思ひしつめてらうたけによりふし給へりとみる程にゝはかにおきあかりておほきなるこのしたなりつるひとりをとりよせてとのゝうしろによりてさといかけ給ほと人のやゝみあふる程もなうあさましきにあきれて物し給さるこまかなるはるのめはなにもいりておほゝれて物もおほえすはらひすて給へとたちみちたれば御そもぬき給つうつし心にてかくし給そと思はゝ又かへりみすへくもあらずあさましけれとれいの御ものゝけの人にとませむとするわさと御前なる人々もいとおしうみたてまつるたちさはきて御そともたてまつりかへなとすれとそこらのはいのひんのわたりにもたちのほりよろつの所にみちたる心ちすればきよらをつくし給わたりにさなからまうてたまふへきにもあらず心たかひとはいひなからなをめつらしうみしらぬ人の御有さまなりやとつまはしきせられうとまじうなりてあはれと思つる心ものこらねとこのころあらたてゝはいみしきこといきなむとおほししつめてよなかになりぬれとそうなとめしてかちまいりさはくよはるのゝしり給こゑなど思ひうとみ給はんにことはりなりよ一夜うたれひかれなきまとひあかし給てすこしうちやすみ給へる程にかしこへ御文たてまつれ給よへにはかにきえいる人のはへしによりゆきの気色もふりいてかたくやすらひはへしに身さへひえてなむ御心をはさる物にて人いかにとりなし侍けんときすくにかき給へり

心さへそらにみたれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖たえかたくこそとしろきうすやうにつゝやかにかい給へれとことにおかしきところもなしてはいときよけなりさえかしこくなどそのし給けるかむの君よかれをなにともおほされぬにかく心ときめきし給へるをみもいれ給はねは御かへりなしおとこむねつふれて思くらし給北方は猶いとくるしけにし給へはみす法などはしめさせ給心のうちにもこの比はかりたにことなくうつし心にあらせ給へとねんし給まことの心はへのあはれなるをみすしらすはかうまでおもひすくすへくもなきけうとさかなとおもひる給へりくるれはれいのいそきいて給御さうそくの事なともめやすくしなしたまはすよにあやしうゝちあはぬさまにのみむつかり給をあさやかなる御なをしなともえとりあへ給はていとみくるしよへのはやけとをりてうとましけにこかれたるにほひなともことやうなり御そともにうつりかもしみたりふすへられける程あらはに人もうし給ぬへければぬきかへて御ゆとの

なといったうつろひ給もくの君御たきものしつゝ

ひとりゐてこかるゝむねのくるしきに思ひあまれるほのをとそみしなこり
なき御もてなしはみたてまつる人たにたたにやはとくちおほひてゐたるまみい
といったしされといかなる心にてかやうの人に物をいひけんなどのみそおほえ給
けるなさげなきことよ

うきことを思ひさはけはさまくにくゆるけふりそいとゝたちそふいところ

とのほかなることゝものもしきこえあらはちうけんになりぬへき身なめりとう
ちなけきていて給ぬ一夜はかりのへたてたにまためつらしうおかしさまさりて
おほえ給ありさまにいとゝ心をわくへくもあらずおほえて心うければひさしう
こもりゐ給へりすほうなどしさはけと御ものゝけこちたくおこりてのゝしるを
きゝ給へはあるましきゝすもつきはちかましき事かならずありなんとおそろし
うてよりつき給はす殿にわたり給時もちかたにはなれる給てきみたちはかり
をそよひはなちてみたてまつり給女ひとゝころ十二三はかりにてまたつきく
おとこふたりなんおはしけるちかきところとなりては御中もへたゝりかちに
てならはし給へれとやむことなうたちならふかたなくてはならひ給へれはいまは
かきりとみ給に候ふ人くもいみしうかなしとおもふちゝ宮きゝ給ていまはし
かかけはなれてもていて給らむにさて心つよくものし給いとをもう人わらへ
なる事なりをのかあらむよのかきりはひたふるにしもなとかしたかひくつをれ
たまはむときこえ給てにはかに御むかへあり北方御心地すこしれいになりてよ
の中をあさましう思なけき給にかくときこえ給へれはしいてたちとまりて人の
たえはてんさまをみはてゝ思とちめむもいますこし人わらへにこそあらめなど
おほしたつ御せうとの君たち兵衛督はかん達部におはすれはことくしとて中
将侍従民部大輔など御車三はかりしておはしたりきこそはあへかめれとかねて
思つることなれとさしあたりてけふをかきりとおもへは候ふ人くもほろく
となきあへりとしころならひ給はぬ旅すみにせはくはしたなくてはいかてかあ
または候はんかたへはをのくさとにまかてゝしつませ給なむになどさため
て人くをのかしゝはかなき物ともなとさとはらひやりつゝみたれちるへし
御てうとゝもはさるへきはみなしたゝめをきなとするまゝにかみしもなきさは
きたるはいとゆゆしくみゆ君たちはなに心もなくてありき給をはゝきみみなよ
ひすゑ給て身つからはかく心うきすくせいまはみはてつれはこの世にあとゝむ
へきにもあらずともかくもさすらへなんおいさきをうてさすかにちりほひ給
はんありさまものかなしうもあへいかなひめ君はとなるともかうなるともを

のれにそひ給へ中／＼おとこ君たちはえさらすまうてかよひみえたてまつらんに人の心とゝめ給へくもあらずはしたなうてこそたゝよはめ宮のおはせんほとかたのやうにましらひをすともかのおとゝたちの御心にかゝれる世にてかく心をくへきわたりそとさすかにしられて人にもなりたゝむことかたしきりとて山はやしにひきつゝきましらむ事のちの世までいみしきことゝなき給にみなふかき心は思わかねとうちひそみてなきおはさうすむかし物語などをみるにもよつねの心さしふかきおやたに時にうつろひ人にしたかへはおろかにのみこそなりけりましてかたのやうにてみるまへにたに名残なきこゝろはかかり所ありてもゝてない給はしと御めのとゝもさしつとひての給なけく日もくれゆきふりぬへき空の気色も心ほそうみゆる夕へなりいたうあれ侍なんはやうと御むかへのきんたちそゝのかしきこえて御めをしのこひつゝなかめおはすひめ君は殿いとかなしうしたてまつり給ならひにみたてまつらてはいかてかあらむいまなどもきこえてまたあひみぬやうもこそあれとおもほすにうつふし／＼てえわたるましとおもほしたるをかくおほしたるなんいと心うきなどこしらへきこえ給たゝいまもわたり給はなんとまちきこえ給へとかくくれなむにまさになうこき給なんやつねにより給ひんかしおもてのはしらを人にゆつる心ちし給もあはれにてひめ君ひわた色のかみのかさねたゝいさゝかにかきてはしらのひはれたるはさまにかうかいのさきしておしいれ給

いまはとてやとかれぬともなれきつるまきのはしらはわれをわするなえも

かきやらてなき給はゝ君いてやとて

なれきとはおもひいつともなにゝよりたちとまるへきまきの柱ぞ御前なる

人ゝもさま／＼にかなしくさしも思はぬ本草のもとさへ恋しからんことゝめとゝめてはなすゝりあへりもくの君は殿の御方の人にてとゝまるに中將のおもとあさけれといし間の水はすみはてゝやとる君やかけはなるへき思かけさ

りしことなりかくてわかれたてまつらんことよといへはもく

ともかくもいはまの水のむすほゝれかけとむへくもおもほえぬよをいてや

とてうちなく御くるまひきいてゝかへりみるもまたはいかてかはみむとはななき心地す木すゑをもめとゝめてかくるゝまでそかへりみ給けるきみかすむゆへにはあらてこゝらとしへ給へる御すみかのいかてかしのひところなくはあらむ宮にはまちとりいみしうおほしたりはゝきたのかたなきさはき給ておほきおとゝをめてたきよすかと思きこえ給へれといかはかりのむかしのあたかたきにかおはしけむとこそおもほゆれ女御をもことにふれはしたなくもてなし給しかと

それは御中のうらみとけさりし程思しれとにこそはありけめとおほしの給よの人もいひなししたになをさやはあるへき人ひとりを思かしつき給はんゆへはほとりまでもにほふためしこそあれと心えさりしをましてかくすゑにすゝろなるまゝこかしつきをしてをのれふるし給へるいとおしみにしほうなる人のゆき所あるましきをとてとりよせもてかしつき給はいかゝつらからぬといひつゝけのゝしり給へは宮はあなきゝにくやよになむつけられ給はぬおとゝをくちにまかせてなおとしめ給そかしき人は思ひをきかゝるむくひもかなとおもふことこそはものせられけめさおもはる我身のふかうなるにこそはあらめつれなうてみなかのしつみ給しよのむくひはうかへしつめいとかしこくこそは思わたい給めれをのれひとりをはさるへきゆかりと思てこそはひとゝせもさる世のひゝきに家よりあまることゝもゝありしかそれをこの生のめいほくにてやみぬへきなめりとの給にいよくはらたちてまかくしきことなどをいひちらし給このおほきたのかたそさかな物なりける大将の君かくわたり給にけるをきゝていとあやしうわかゝしきなからひのやうにふすへかほにて物し給けるかなさうしみはしかひきゝりにきはゝしき心もなき物を宮のかくかるゝしうおはすると思てきむたちもあり人めいとおしきに思みたれてかむのきみにかくあやしきことなん侍る中ゝこゝろやすくは思給なせとさてかたすみにかくろへてもありぬへき人の心やすさをおたしう思給へつるにゝはかにかの宮ものし給ならむ人のきゝみることもなさけなきをうちほのめきてまいりきなむとていて給よきうへの御そやなきのしたかさねあをにひのきのさしぬきゝ給てひきつくるひ給へるいとものゝしなとかはにけなからむと人ゝはみたてまつるをかむの君はかゝることゝもをきゝ給につけても身の心つきなうおほしゝらるれはみもやり給はす宮にうらみきこえむとてまうて給まゝにまつとのにおはしたればもくの君などいてきてありしさまかたりきこゆひめきみの御ありさまきゝ給てをゝしくねんし給へとほろゝとこほるゝ御気色いとあはれなりさてもよの人にもにすあやしき事ともをみすくすこゝらのとしころの心さしをみしり給はすありけるかないと思のまゝならむ人はいまゝてもたちとまるへくやはあるよしかのさうしみはとてもかくてもいたつら人とみえ給へはおなしことなりをさなき人ゝもいかやうにもてなし給はむとすらむとうちなけきつゝかのまきはしらをみ給にてもをさなけれと心はへのあはれに恋しきまゝにみちすから涙をしのこひつゝまうて給へれはたいめむし給へくもあらずなにかたゝ時にうつる心のいまはしめてかはり給にもあらずとしころ思うかれ給さまきゝわたりてもひさし

くなりぬるをいつくをまた思ひなをるへきおりとかまたむいと、ひか／＼しきさまにのみこそみえはて給はめといさめ申給ことはりなりいとわか／＼しき心ちもし侍かなおもほしすつましき人／＼も侍れはとのとかに思侍ける心のをこたりをかへす／＼きこえてもやるかたなしいまはた、なたらかに御らんしゆるしてつみさりとこころなうよ人にもことはらせてこそかやうにも、てない給はめなときこえわつらひておはすひめ君をたにみたてまつらむときこえ給へれといたしたてまつるへくもあらすおとききみたち十なるは殿上し給いとうつくし人にほめられてかたちなとようはあらねといとらう／＼しう物の心やう／＼しり給へりつきの君は八はかりにていとらうたけにひめ君にもおほえたれはかきなてつ、あこをこそは恋しき御かたみにもみるへかめれなとうちなきてかたらひ給宮にも御気色給はらせ給へとかせをこりてためらひ侍程にてとあれははしたなくていて給ぬこきんたちは車にのせてかたらひおはす六条殿にはえゐておはせねはとのにと、めてなをこ、にあればみにも心やすかるへくとの給うちなかめていと心ほそけにみをくりたるさまともいとあはれるにもの思は、りぬる心地すれと女きみの御さまのみるかひありてめてたきにひか／＼しき御さまを思くらふるにもこよなくてよろつをなくさめ給うちたえてをとつれもせずはしたなかりしにことつけかほなるを宮にはいみしうめさましかりなけき給はるのうへもき、給てこ、にさへうらみらる、ゆへになるかくるしきこと、なけき給をおと、の君いとおしとおほしてかたき事なりをのか心ひとつにもあらぬ人のゆかりに内にも心をきたるさまにおほしたなり兵部卿の宮なともえし給とき、しをさいへと思やりふかうおはする人にてき、あきらめうらみとけ給にたなりをのつから人のなからひはしのふること、思へとかくれなき物なれはしかおもふへきつみもなしとなん思侍との給か、ること、ものさはきにかむの君の御けしきいよ／＼はれまなきを大將はいとおしと思あつかひきこえてこのまいる給はむとありしこともたえきれてさまたけきこえつるをうちにもなめく心あるさまにきこしめし人／＼もおほすところあらむおほやけ人をたのみたる人はなくやはあると思かへしてとしかへりてまいらせたてまつり給おとこたうかありければやかてその程にきしきいといまめかしくなくてまいり給かた／＼のおと、たちこの大將の御いきをひさへさしあひ宰相中将ねんころに心しらひきこえ給せうとのきみたちもか、るおりにとつとひついせうしよりてかしつき給さまいとめてたし承香殿のひんかしおもてに御局したりにしに宮の女御はおはしければめたうはかりのへたてなるに御心の中ははるかにへた、りけんかし

御方くいつれとなくいとみかはし給てうちわたり心にく、おかしきころをひ
なりことにみたりかはしきかういたちあまたもさふらひ給はす中宮こき殿の女
御この宮の女御左大殿の、女御などさふらひ給さては中納言さい将の御むすめ
ふたりはかりそ候給けるたうかはかたく、にさと人まいりさまことにけにき
わ、しきみ物なれはたれもく、きよらをつくし袖くちのかさなりこちたくめて
たくと、のへ給春宮の女御もいとはなやかにもてなし給てみやはまたわかくお
はしませとすへいといまめかし御前中宮の御方すさく院とにまいりてよいた
うふけにければ六条の院にはこのたひは所せしとはふき給朱雀院よりかへりま
いりて春宮の御方くめくるほとによあけぬほのくとおかしきあさほらけに
いたくえひみたれたるさましてたけかはうたひける程をみれはうちの大殿のき
んたちは四五人はかり殿上人のなかにこゑすくれかたちきよけにてうちつ、き
給へるいとめてたしわらはなる八らう君はむかひはらにていみしうかしつき給
かいとうつくしうて大将との、大らう君とたちなみたるをかむのきみもよそ人
とみ給はねは御めとまりけりやむことなくましらひなれ給へる御かたくより
もこの御つほねの袖くちおほかたのけはひいまめかしうおなしもの、色あひか
さなりなれともによりことにはなやかなりさうしみも女房たちもかやうに御心
やりてしはしはすくい給はましとおもひあへりみなおなしことかつけたすわ
たのさまもにほひかことにらうくしうしない給てこなたはみつむまやなりけ
れとけはひにきは、しく人く心けさうしそしてかきりあるみあるしなどのこ
と、も、したるさまことによるゐありてなむ大将殿せさせ給へりけるとのゑと
ころにゐ給てひ、とひきこえくらし給ことはよさりまかてさせたてまつりてん
か、るついでにとおほしうつるらん御宮つかへなむやすからぬとのみおなしこ
とをせめきこえ給へと御かへりなしさふらふ人くそと、の心あはた、しき
程ならてまれくの御まいりなれは御心ゆかせ給はかりゆるされありてをまか
てさせ給へときこえさせ給しかはこよひはあまりすかくしうやときこえたる
をいとつらしと思てさはかりきこえし物をさも心になはぬよかなとうちなけ
きてゐ給へり兵部卿の宮御前の御あそひに候給てしつ心なくこの御つほねのあ
たり思やられ給へはねんしあまりてきこえ給へり大将はつかさの御さうしにそ
おはしけるこれよりとてとりいれたれはしふくにみたまふ

みやま木にはねうちかはしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかなさへつ
るこゑもみ、と、められてなんとありいとおしうおもてあかみてきこえんかた
なく思ゐ給へるにうへわたらせ給月のあかきに御かたちはいふよしなくきよ

にてたゝかのおとゝの御けはひにたかふところなくおはしますかゝる人は又もおはしけりとみたてまつり給かの御心はへはあさからぬもうたてもの思くはゝりしをこれはなとかはさしもおほえさせ給はんいとなつかしけに思しことのかひにたるうらみをの給するにおもてをかんかたなくそおほえ給やかほをもてかくして御いらへもえきこえたまはねはあやしうおほつかなきわさかなよろこひなども思しり給はんと思ふことあるをきゝいれ給はぬさまにのみあるはかゝる御くせなりけりと給はせて

なとてかくはひあひかたきむらさきを心にふかく思ひそめけむこくなりはつましきにやとおほせらるゝさまいとわかくきよらにはつかしきをたかひ給へるところやあると思なくさめてきこえ給宮つかへのらうもなくてことしかゝいし給へる心にや

いかならん色もしらぬむらさきを心してこそ人はそめけれいまよりなむ思給へしるへきときこえ給へはうちえみてそのいまよりそめ給はんこそかいなかへいことなれうれふへき人あらはことはりきかまほしくなむといたうゝらみ

させ給御けしきのまめやかにわつらはしければいとうたてもあるかなとおほえておかしきさまをもみえたてまつらしむつかしきよのくせなりけりと思にまめたちてさふらひたまへはえおほすさまなるみたれこともうちいてさせたまはてやうやうこそはめなれめとおほしけり大將はかくわたらせ給へるをきゝ給ていとゝしつ心なければいそきまとはし給身つかからもにけなきこともいてきぬへき

身なりけりと心うきにえのとめ給はすまかてさせ給へきさまつきしきことつけともつくりいてゝちゝおとゝなとかしこくたはかり給てなん御いとまゆるさ

れ給けるさらは物こりしてまたいたしたてぬ人もそあるいとこそからけれ人よりさきにすゝみにし心さしのひとにをくれてけしきとりしたかふよむかしのなにかしかためしもひきいてつへき心地なむするとてまことにいとくちおしとおほしめしたりきこしめしゝにもこよなきかまさりをはしめよりさる御心なからんにてたにも御らんしすくすましきをまいていとねたうあかすおほさるされとひたふるにあさきかたにおもひうとまれしとていみしう心ふかきさまにの給契てなつけ給もかたしけなう我はわれと思ものをとおほす御てくるまよせて

こなたかなたの御かしつき人とも心もとなかり大將もいと物むつかしうたちそひさはき給までえおはしましはなれすかういときひしきちかきまもりこそむつかしけれとにくませ給

九重にかすみへたては梅のはなたゝかはかりも匂ひこしとやことなること

なきことなれとも御ありさまけはひをみたてまつる程はおかしくもやありけん
のをなつかしみあかいつへきよをおしむへかめる人も身をつみて心くるしうな
むいかてかきこゆへきとおほしなやむもいとかたしけなしとみたてまつる

かはかりは風にもつてよはなのえにたちならふへきにほひなくともさすか

にかけはなれぬけはひをあはれとおほしつゝかへりみかちにてわたらせ給ぬや
かてこよひかののとおほしまうけたるをかねてはゆるされあるましきによ
りもらしきこえ給はてにはかにいとみたりかせのなやましきを心やすき所にう
ちやすみ侍らむ程よそくにてはいとおほつかなく侍らむをとおいらかに申な
い給てやかてはたしたてまつり給ちゝおとゝにはかなるをきしきなきやうにや
とおほせとあなちにはさばかりのことをいひさまたけんも人の心をくへしとお
ほせはともかくももとよりしたいならぬ人の御ことなれはとそきこえ給ける六
条殿そいとゆくりなくほいなしとおほせとなかはあらむ女もしほやくけふり
のなひきけるかたをあさましとおほせとぬすみもていきたらましとおほしなす
らへていとうれしく心ちおちぬかのいりぬさせ給へりしことをいみしうえし
きこえさせ給も心つきなくなをくしき心ちしてよには心とけぬ御もてなし
よくけしきあしかの宮にもさこそたけうの給しかいみしうおほしわふれとた
えてをとつれすたゝ思ことかなひぬる御かしつきにあけくれいとなみてすくし
給二月にもなりぬ大殿はさてもつれなきわさなりやいとかうきはくしうとし
も思はてたゆめられたるねたさを人わろくすへて御心にかゝらぬおりなく恋し
う思いてられ給すくせなといふものをろかならぬことなれとわかあまりなる心
にてかく人やりならぬものは思そかしとおきふしおもかけにそみえ給大将のお
かしやかにわらゝかなるけもなき人にそひゐたらむにはかなきたはふれことも
つゝましうあいなくおほされてねんし給をあめいたうふりていどのとやかなる
ころかやうのつれくもまきはし所にわたり給てかたらひ給しさまなどのい
みしうこひしければ御ふみたてまつり給右近かもとにしのひてつかはすもかつ
は思はむことをおほすになにこともえつゝけ給はてたゝおもはせたることゝも
そありける

かきたれてのとけき比の春雨にふるさと人をいかにしのふやつれくゝにそ
へてうらめしう思いてらるゝことおほう侍をいかてかわきゝこゆへからむなど
ありひまにしのひてみせたてまつれはうちなきてわか心にも程ふるまゝに思
てられ給御さまをまほに恋しやいかてみたてまつらんなとはえの給はぬおやに
てけにいかてかはたいめもあらむとあはれなり時くゝむつかしかりし御けしき

を心つきなう思きこえしなどはこの人にもしらせたまはぬことなれは心ひとつにおほしつゝくれと右近はほのけしきみけりいかなりけることならむとはいまに心えかたく思ける御返きこゆるもはつかしけれとおほつかなくやはとてかき給

なかめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのはさらめや程ふるころ

はけにことなるつれくもまさり侍けりあなかしことゐやくしくかきなし給へりひきひろけてたま水のこほるゝやうにおほさるゝを人もみはうたてあるへしとつれなくもてなし給へとむねにみつ心ちしてかのむかしのかむの君を朱雀院のきさきのせちにとりこめ給しおりなとおほしいつれとさしあたりたることなれはにやこれはよつかすそあはれなりけるすいたる人は心からやすかるまじきわさなりけりいまはなにゝつけてか心をもみたらましにけなき恋のつまなりやとさましわひ給て御ことかきならしてなつかしうひきなし給しつまをとおもひいてられ給あつまのしらへをすかゝきてたまもはなかりそとうたひすさひ給も恋しき人にみせたらはあはれすくすましき御さまなり内にもほのかに御らんせし御かたちありさまを心にかけて給てあかもたれひきいにしすかたをとにくけるなるふることなれと御ことくさになりてなむなかめさせ給ける御文はしのひくゝにありけり身をうき物に思しみ給てかやのすさひことをもあいなくおほしければ心とけたる御いらへもきこえ給はすなをかありかたかりし御心をきてをかたかたにつけておもひし給へる御ことそはすられさりける三月になりて六条とのゝ御前のふち山ふきのおもしろきゆふはへをみ給につけてもまつみるかひありてい給へりし御さまのみおほしいてらるれば春の御前をうちすてゝこなたにわたりて御らむすぐれたけのませにはさとなうさきかゝりたるにほひいとおもしろいゝろに衣をなどの給て

思はすにいてのなかみちへたつともいはてそこふる山ふきのはなかほにみ

へつゝなどの給もきく人なしかくさすかにもてはなれたることはこのたひそおほしけるけにあやしき御心のすさひなりやかりのこのいとおほかるを御らんしてかんしたち花などやうにまきはしてわさとならすたてまつれ給御文はあまり人もそめたつるなとおほしてすくよかにおほつかなき月日もかさなりぬるをおもはすなる御もてなしなりとうらみきこゆるも御心ひとつにのみはあるまじうきゝ侍れはことなるついてならてはたいめむのかたからんをくちおしう思給るなとおやめきかき給て

おなしすにかへりしかひのみえぬかないかなる人かてにゝきるらんとか

さしもなと心やましうななどあるを大将もみたまひてうちわらひて女はまことのおやの御あたりにもたはやすくうちわたりみえたてまつり給はむことついてなくてあるへきことにあらすましてなそこのおと、のおりく思ひはなたすうらみことはし給とつふやくもにくしとき、給御返こ、にはえきこえしとかきにく、おほいたれはまろきこえんとかはるもかたはらいたしや

すかくれてかすにもあらぬかりのこをいつかたにかはとりかくすへきよろ

しからぬ御けしきにおとろきてすきくしやときこえ給へりこの大将のかゝるはかなしこといひたるもまたこそきかさりつれめつらしうとてわらひ給心のうちにはかくらうしたるをいとからしとおほすかのもとのきたの方は月日へたゝるまゝにあさましとものを思しつみいよくほけしれてものし給大将との、おほかたのとふらひなに事をもくはしうおほしをきてきむたちをはかはらす思ひかしつき給へはえしもかけはなれ給はすまめやかなるかたのたのみはおなしことにてなむものし給けるひめ君をそたえかたく恋きこえ給へとたえてみせたてまつり給はすはかき御心のうちにこのち、君をたれもくゆるしなううらみきこえていよくへたて給ことのみまされは心ほそかなしきにおとこ君たちはつねにまいりなれつゝかむのきみの御ありさまなどをものつからことにふれてうちかたりてまろをもらうたくなつかしうなんし給あけくれおかしきことをこのみてもものし給なといふにうらやましうかやうにてもやすらかにふるまう身ならさりけんをなけき給あやしうおとこ女につけつゝ人に物を思はするかむのきみにそおはしけるそのとしの十一月にいとおかしきちこそさへいたきいてたまへれは大将も思やうにめてたしとめてかしつき給ことかきりなしそのほとありさまいはすとも思ひやりつへきことそかしち、おとゝもをのつから思やうなる御すくせとおほしたりはさどかしつき給きむたちにも御かたちなどはおとり給はすとうの中将もこのかむの君をいとなつかしきはらからにてむつひきこえ給ものからさすかなる御けしきうちませつゝ宮つかひにかひありて物し給はまし物をとこのはか君のうつくしきにつけてもいまゝてみこたちのおはせぬなけきをみたてまつるにいかにめいほくあらましとあまりのことをそ思ての給おほやけことはあるへきさまにしりなとしつゝまいり給ことそやかてかくてやみぬへかめるさてもありぬへきことなりかしまことやかのうちのおほいとの、御むすめのないしのかみのそみしきもさるをゝくせなれはいろめかしうさまよふ心さへそひてもてわつらひ給女御もついにあわくしきことこの君そひきいてんとゝもすれは御むねつふし給へとおとゝのいまはなましらいそとせし

の給をたにきゝいれすましらひいてゝものし給いかなるおりにか有けむ殿上人
あまたおほえことなるかきりこの女御の御かたにまいりて物のねなとしらへな
つかしき程のひやうしうちくはへてあそふ秋のゆふへのたゝならぬに宰相の中
将もよりおはしてれいならすみたれてものなどの給を人くめつらしかりてな
を人よりことにもとめつるにこのあふみの君人くのなかをゝしわけていてゐ
給あなうたてやこはなそとひきいるれといとさかなけにゝらみてはりゐたれは
わつらはしくてあふなきことやの給いてんとつきかはすにこのよにめなれぬま
め人をしもこれそなゝとめてゝさゝめきさはくこゑいとしるし人くいとくる
しと思にこゑいとさはやかにて

興津ふねよるへなみ路にたゝよはゝさほさしよらむとまりをしへよたなゝ
しをふねこきかへりおなし人をやあなはるやといふをいとあやしうこの御方に
はかうようゐなきこときこえぬものをと思まはすにこのきく人なりけりとおか
しうて

よるへなみ風のさはかす舟人も思はぬかたにいそつたいせすとはしたな
かめりとや